令和6年度

# 作文コンクール

# 入賞作品集

未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール

## 建設産業で働く方の作品

高校生の作文コンクール

## 高校生の作品

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和６年度　建設産業人材確保・育成推進協議会

# 作文コンクール入賞作品集

## 選 定 結 果


## 建設産業で働く方の作品 …… P3

(未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール)

### 国土交通大臣賞

佐々木ゆのか　穂積建設工業（株）　青森県　「魅力に気がつく瞬間」…… P4

### 不動産・建設経済局長賞

藤原克彰　仙建工業（株）　宮城県　「#1を目指して」…… P5
倉井大介　渡辺建設（株）　栃木県　「繋ぐは命、繋ぐは未来の礎」…… P6
高島菜央　（株）香山組　兵庫県　「建設ディレクターがつなぐ未来」…… P7
塚原慶心　（株）神崎組　兵庫県　「「当たり前」を繋ぐもの」…… P8

### 優 秀 賞

尾形蓮　丸か建設（株）　宮城県　「mm（ミリ）の世界で生きる」…… P9
小松秀徳　熱海建設（株）　宮城県　「つながりの輪」…… P10
髙橋一志　（株）香山組　兵庫県　「BIM/CIMで繋ぐ現場と地域」…… P11
長濵祐希　（株）森長組　兵庫県　「付加価値を高める」…… P12

## 高校生の作品 …… P13

（高校生の作文コンクール）

### 国土交通大臣賞

鈴木和弥　静岡県立浜松工業高等学校 建築科３年　「笑顔のあるコミュニティ再生を、建築の力で」…… P14

### 不動産・建設経済局長賞

尾﨑里緒奈　静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列２年　「笑顔を届ける大きな夢を叶えたい」…… P15
望月実来　静岡県立科学技術高等学校 建築デザイン科１年　「承前啓後」…… P16
笠原陸　岡山県立岡山工業高等学校 土木科３年　「百年後をつくる」…… P17
野中心路　福岡県立八女工業高等学校 土木科２年　「未来をつなぐ」…… P18

### 優 秀 賞

大橋心晴　栃木県立宇都宮工業高等学校 建築デザイン科３年　「未来への扉」…… P19
土屋瑞季　山梨県立甲府工業高等学校 建築科３年　「その命を救いたい」…… P20
高桑芽来　富山県立高岡工芸高等学校 建築科２年　「憧れの人を目指して」…… P21
中野歩夢　金沢市立工業高等学校 土木科３年　「当たり前をつくる仕事」…… P22
宮下太久郎　金沢市立工業高等学校 土木科３年　「それでもやっぱり」…… P23
笠井巧　静岡県立沼津工業高等学校 建築科３年　「努力と苦労の美しさ」…… P24
上島翔大　静岡県立浜松工業高等学校 理数工学科３年　「私の理想」…… P25
松下燿大　静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列２年　「未来を創る」…… P26
岩室奏篤　滋賀県立彦根工業高等学校 建設科１年　「未来の環境と建築」…… P27
鳥越眞洋　岡山県立岡山工業高等学校 建築科１年　「夢に向かって」…… P28
藤原悠　岡山県立岡山工業高等学校 土木科３年　「道路パトロール」…… P29
井上みこと　長崎県立長崎工業高等学校 建築科３年　「強くなった将来の夢」…… P30
中川元太　長崎県立佐世保工業高等学校 建築科２年　「未来へ繋ぐ建設のバトン」…… P31
平野蓮翔　長崎県立長崎工業高等学校 建築科２年　「“木軸ペン”から始まったものづくりの世界」…… P32

# 受賞作品の講評

## 運営委員長　古阪秀三

この作文コンクールは建設産業で働く皆さんからの「私たちの主張」と高校生の皆さんからの「高校生の作文コンクール」の2つの部門で成り立っています。

「私たちの主張」は、建設産業で働く方々の思いであり、今年で17回目となります。今年のテーマは「建設産業と地域のつながり」、「伝えたい職人（プロ）のこだわり」で、全国から435作品の応募がありました。最少年齢は18歳、最高年齢は68歳でした。また、女性の応募が今年は13.8%でした。さらに、30歳未満の若者の応募が約73%、一方では、仕事の第一線を退かれる頃になる熟練の先輩の方々が若者に伝えておきたいという意欲を持って、「私たちの主張」をしてくださいました。応募して下さった435人の方々に心から敬意と謝意を表します。

今年、国土交通大臣賞に輝いた方は佐々木ゆのかさんです。

佐々木ゆのかさんは『魅力に気がつく瞬間』と題して、建設業とは全く縁のなかった女子高生が現場見学会に参加して、土木の魅力や重要性に気付いて、学校の先生の反対も押し切って地元建設会社に就職し、1年目でやりがいをもって働いている等身大の姿がリアルに描かれている。建設業に魅力を感じるけれど、躊躇している学生の背中を押す作品になっている。自分もいつかは建設業の魅力を発信する側になりたいという覚悟がすばらしい。

不動産・建設経済局長賞には次の4人が選ばれました。

藤原克彰さんは、『#1を目指して』。地域の現状、その先が丁寧に書かれている。その一つのこととして、ニューヨークタイムズが「2023年に行くべき52か所」を発表し、ロンドンに続く2番目に盛岡市が紹介されており、その中心街にある歴史的なこと等が、若者（藤原氏）の作品の中で魅力をもって伝えられている。

倉井大介さんは、『繋ぐは命、繋ぐは未来の礎』。建設業のやりがいについて、地域の安全確保、地域の活性化という2面から、ご自身が関わられた事業を具体的に挙げ、一般にもわかりやすい言葉で、真摯に仕事に向き合っていること、建設業の魅力がしっかりと伝わってきている。

高島菜央さんは、『建設ディレクターがつなぐ未来』。「建設ディレクター」という新しい職域に自らチャレンジし、現場監督の負担軽減に寄与することだけにとどまらず、建設業の魅力や職人の技術を発信するイベントを企画するに至った過程や気持ちが大変分かりやすく描かれている。「建設ディレクター」という仕事を広めていく上でも効果大である。

塚原慶心さんは、『「当たり前」を繋ぐもの』。建設業で働く方に、建設業の仕事の魅力を改めて気づかせてくるとともに、建設業に関心のない人々に、建設業があるからこそ「当たり前」の生活があることに気づかせてくれる作品であり、建設業のイメージアップにつながる。これから就職する若者にも、やりがいのある産業であることが伝わるのではなかろうか。

一方、「高校生の作文コンクール」は、全国の高校の建築学科、土木学科等で勉強をする若者が建設産業に抱くイメージや夢を発表するもので、今年が12回目です。今年のテーマは「建設産業についての私の思い」又は「日々の学びと私の夢」で、全国から952作品の応募がありました。また、その中での女子の応募の割合が約18%となりました。応募してくださった952人の若者の勇気をたたえ、また敬意と謝意を表します。

今年、国土交通大臣賞に輝いた方は鈴木和弥さんです。

鈴木和弥さんの作文は『笑顔のあるコミュニティ再生を、建築の力で』。鈴木さんが幼い頃、貧しい田舎から日本に来た時に感じた幸せの原点が「自宅」や「街」にあったことの描写が大変リアリティに富んでおり、心を打たれた感じがした。『私は学びを辞めない』という宣言に大変な力強さがあった。将来についても筋が通った考えを持っており、国内の枠にとどまらず、世界に目を向けている。鈴木さんの今後の活躍に期待したい。

不動産・建設経済局長賞には次の4人が選ばれました。

尾﨑里緒奈さんは、『笑顔を届ける大きな夢を叶えたい』。私の夢は人々の暮らしを支え、笑顔を生み出す大工になること。そのため、小さい頃からレゴブロックで街や家具を作ったり、段ボールで家を作ったり。家を建ててくれた大工さんの一挙手一投足からも目が離せない。それら多くの道具や機械を使いこなす必要。未来に向けて猛勉強している。がんばれ!!

望月実来さんは、『承前啓後』。日々すごしている「当たり前」の中に、建設の魅力があることを読み手に気づかせてくれる文章であり、建設産業の魅力発信に大きくつながると感じる。また、作者の「街を守りたい」という強い想いからの建築を学ぶ姿勢に感心する。建設産業の魅力発信に期待したい。

笠原陸さんは、『百年後をつくる』。「学生がインフラメンテに参加する活動（岡山道路パトロール隊）」を通して土木インフラの重要性を認識し、土木技術者を目指すというストーリーは訴求性大である。「百年後をつくる」というタイトルが世代を超えた安心安全な国土を作っていくという決意表明に感じる。

野中心路さんは、『未来をつなぐ』と題して、ご自身の将来の夢である「土木の知識を増やして、見えないところで守り、地域の人を笑顔にしたい」ということについて、具体的なエピソードを加えながら、丁寧に、真剣に、かつ、平時・災害時の両面からしっかりと綴られているところが素晴らしい。見事な意見であり、結論である。

「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」の応募作品を読みながら、いつも感じることですが、2つの部門とも、実際に経験したこと、観察したこと、家族・同僚・友達と話したこと、さらに将来への期待などが丁寧にかつわかり易く書かれています。それが契機となって建設産業で働くことになったという事例が多いことも納得です。すべてを公開して読んでいただくのがいいのではないかとの印象を持っています。

その一方で、日本の建設産業の近未来の市場は相当な変革が求められます。伝統的なこと、技術的な継続性を大事にすることはいうまでもないことですが、その一方で、思い切った改善、革新等の活動も重要です。このような状況の下、素直に自分が感じたこと・考えたことが書けること、悩ましいこと・問題だと思うことを文字で伝えられること、これらのことがいかに大切かを「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」を読みながら確信しました。これからも大いに文章を書きましょう。そして他者に伝えましょう。それらが建設産業の改善、働きがいのある産業へとつながることを期待したいと思います。

写真撮影：衣笠 名津美

# 建設産業人材確保・育成推進協議会

# 令和６年度
# 未来を創造する建設産業
# 「私たちの主張」作文コンクール

## ■趣　　旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設産業で働く方々の熱い想いを伝えていただくとともに、一般の方々に建設産業についての理解を深め、関心を高めていただくために作文コンクール「私たちの主張」を実施しています。

今コンクールは、平成20年度から実施し、今年度で17回目となりました。

## ■募集概要

応募資格　建設産業の仕事に従事している方
応募期間　令和6年5月7日（火）～ 6月28日（金）
応募テーマ　建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。
　　建設産業と地域のつながり　又は　伝えたい職人（プロ）のこだわり
応募総数　435作品

## ■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、（一財）建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]
https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html

## ■選考委員

古阪秀三　立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員教授
　　建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
城　麻実　国土交通省 不動産・建設経済局 建設振興課長
上田国士　（一社）全国建設業協会 業務執行理事
樋脇　毅　（公社）全国鉄筋工事業協会 常任理事
奥地正敏　（一財）建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事

2024 ESSAY CONTEST

## 国土交通大臣賞

# 魅力に気がつく瞬間

佐々木（ささき） ゆのか［穂積建設工業株式会社 / 青森県］

私は地元八戸の建設会社に就職し、土木工事の現場監督をしている社会人2年目だ。

幼い頃から可愛い服が好きだったため、私服で出社できる仕事に就きたいと考えていた。きらきらした生活と、女性らしい職業に憧れていたのに、なぜ土木工事の現場監督をしているのか。度々家族や友人から不思議に思われ、現場監督っぽくないとよく言われている。この職業を選んだ理由を問われる度に、この仕事のやりがいと楽しさについて考えている。

そんな私が建設業に出会ったのは高校2年生の頃である。学科長の勧めにより、三陸沿岸道路の建設現場の見学に行った。遠足感覚で参加した行事で、初めて重機が動いているところを見た。山を切り開いて道路を作っている様子は壮観だった。翌年に完成した道路を見学した際に、この道路は地元の人の生活を、私の生活を便利にすると思った。感動と同時に、自分は土木工事に関わる仕事に就くかもしれないと思った。しかし、大変な職業というイメージがあったためとても悩んだ。私は重い荷物を持つ力も、暑さ寒さに耐えられる十分な体力も持っていない。女性が働きやすい職業が増えてきた社会で、わざわざ苦労する道に進まなくていいと学校の先生に言われたが、やりがいを見出せない職業よりは、大変だがやりがいがある職業に就いた方が幸せなはずだと思った。以上がこの職業に就こうと思った経緯である。

若い世代は大半が都会に就職する。私のクラスでも、40人中3人しか地元に残らなかった。そして、地方の企業は従業員の高齢化に伴う人手不足に悩まされていると聞く。建設業も例外ではない。実際に現場にいると、2、30年後が心配になるほどに作業員の年齢層が高いことを実感する。私は地元の建設産業が人手不足により衰退していくのが怖い。

地元の建設業に興味を持つ若者が増えることが活性化に繋がる近道だと思う。しかし、興味がない人に興味を持つよう促すことは難しい。若い世代の大多数は効率重視だ。少ない苦労で大きな利益がモットーな世代に、やりがいが売りである建設産業は受けが悪い。それを理解した上で、それに打ち勝つような楽しさと、地元のインフラを支えることのやりがいがあることを理解してほしいと思う。

私のやりがいは、地元のインフラに携わりながら、地元の人の暮らしがより良いものになっていくのを近くで感じることである。私の1番仲の良い友人が「この橋ができたら、私の家から一直線で出勤できるようになるんだよね。」とよく話している。私は今、その橋につながる道路の建設に携わっている。自分の日々の仕事が、大好きな友人の「便利」に繋がることがとても嬉しくて、今までで最大のやりがいを感じている。

建設産業は、その地域の「安全」や「生活水準」に直接関わることができる。地元の建設産業に携わることは、身近な人の暮らしに貢献していることをとても近くで実感できるということだ。それは、地元の建設会社に就職したからこそ感じられるやりがいである。生まれてからずっと過ごしてきた八戸の街並みが変わっていく様子を、傍から見ているだけではなく、変わっていく景観の中に自分が携わった建設物があるという喜びを理解した。だから私はこの仕事を続けたいと思うようになった。

小さい頃に憧れた生活はできていない。周りの人が不思議に思うほど自分に似合っていない職業。不安なことばかりだった。しかし、地元に貢献できる実感を得られた今は、不安よりもやりがいが大きくなった。同時にいくつもの目標ができたため、日々が充実している。

地域に根付いた建設産業だからこそ、味わえるやりがいがある。このことを知った私は、できるだけ長くこの職業に就いていたいと思うようになった。できるだけ多くの若い世代が、地元の建設産業の魅力に気がつけるとよい。今は似合わない「現場監督」という職業が板につくようになったら、高校生の頃に現場見学会で味わった感動を、多くの若い世代が感じられるよう、私もその魅力を伝える側の一人になりたい。

## 不動産・建設経済局長賞

# #1を目指して

藤原（ふじわら） 克彰（かつあき）［仙建工業株式会社 / 宮城県］

『52 Places to Go in 2023 #2 MORIOKA Japan』2023年1月12日にアメリカのニューヨーク・タイムズが『2023年に行くべき52か所』を発表し、イギリスの首都ロンドンに続く2番目に盛岡市が紹介されました。中心市街地に歴史的な建物と川や公園などの自然があり、まちを歩いて楽しめるところや、コーヒー店、わんこそばのほか、書店、ジャズ喫茶などの文化が根付くまちであることが評価され選ばれました。

その盛岡まで東京から新幹線で数時間と紹介された玄関口が盛岡駅です。私は盛岡がニューヨーク・タイムズの記事で紹介される前から現在まで、盛岡駅の改修工事に携わっています。少しずつ変化する外観と、その駅舎を写真に収めるお客さま・観光客の増加を日々感じながら働いています。

盛岡の玄関口である盛岡駅を含め、今回紹介された建物、店舗、公園、それらからなる街並みは、私たち建設業者がつくり、まもっています。100年以上も前に建てられた建物を現代に残す保存修復工事、既存の建物をおしゃれなコーヒー店に生まれ変わらせるリニューアル工事、300年ぶりの城跡石垣修復工事、お客さまの安全と鉄道の安全安定輸送を支える駅舎改修工事、それらすべては地域、そしてそこに生活する人・訪れる人とつながる仕事です。

建設産業と言えば、きつい・汚い・危険の3Kのイメージが根付いています。確かにこれまでは、長時間労働や少ない休日、真夏や真冬の屋外作業、高所や重機のそばでの作業等、厳しい労働環境で働かなければならないこともありました。また、私のように鉄道などのインフラ整備に携わる人は、昼夜を問わず働かなければならない場合もあります。

しかし、建設産業は給与が良い・休暇が取れる・希望が持てるの『新3K』に変わりつつあります。給与面では、建設業に関わる技能者の適正な評価に役立てるための建設キャリアアップシステムの加入率が増えており、建設産業で働く人々がより公平で適正な報酬を受けられる環境が整ってきています。休暇面では、時間外労働の上限規制が改正され、私の会社でも4週8休が定着しています。また、4週8休を前提とした工期設定も定着し、発注者の理解も得られています。また、紙や口頭ベースで行っていた現場の施工管理・調整業務はデジタル化により効率化が進められ、会議・打合わせ等でのWEB会議の活用により、タイムリーな情報の共有化と移動ロス低減による生産性の向上も図られています。希望面では、施工BIMを活用し、3Dスキャナーと併用し施工前段階での検討を充実させ、円滑な施工を実施しています。ICT分野においては、バックホウ掘削支援ツールの試行等、ロボット化の導入も検討されています。

建設業界を取巻く環境は、人材・担い手不足、建設資材の高騰等、依然として厳しい状況が続いています。そのような中でも、今後も続く建設需要に加え、加速度的に進行する社会インフラの劣化対策や、多発・激甚化する自然災害等への対応も求められています。

この課題を解決するためには、将来の建設産業を支える人材・担い手を確保することが急務となっています。同時に、建設産業の魅力を伝えていかなければなりません。

『新3K』でも触れたように、建設産業は魅力ある仕事に変わりつつあります。適正な評価により働きに見合った給与が受け取れ、週休2日の休暇も確保でき自分の時間が持てます。生産性の向上を目的としたICT技術の導入は増えており、今後も最新技術の活用により希望ややりがいが持てることでしょう。そして何より、地域とつながり、守り手としての魅力ある役割があります。盛岡のような行くべき地域は、私たち建設産業がつくっているのです。地域をまもることで評価されるのです。建設産業はただ建物や構造物、インフラをつくるだけではなく、地域を良くし地域に貢献する仕事なのです。

次なる行くべき地域#1の創造を目指して、魅力ある仕事#1を目指して、地域と1番つながるこの場所で、私はこれからも誇りを持って働き続け、魅力を伝えていきます。

## 不動産・建設経済局長賞

# 繋ぐは命、繋ぐは未来の礎

倉井（くらい） 大介（だいすけ）［渡辺建設株式会社 / 栃木県］

変な題名。そう思う方々が大半なのではないでしょうか。しかしこれは建設業界に足を踏み入れ早六年、多種多様な現場を経験し、十人十色な方々と触れ合い、素晴らしい経験を積ませていただいた中で得た、知見を私なりに考えまとめた題名なのです。今回は、この題名を付けるに至った二つの繋がりをご紹介させていただきます。

まず一つ目の繋がりを感じたのは、私が圃場整備という工事を受け持ったときのことでした。圃場整備とは、その地域一帯の農地を整備・開発、区画整理により生産性を高め次世代の担い手の確保を目的とする事業のこと。言わば土地改良を行う工事です。この工事は非常に面白く、河川や構造物、宅地造成などの一般的な工事とは違い、地元の方々の声を聞き、それを反映させていくことにより、二人三脚で現場を作り上げていく、まさに建設産業と地域の繋がりを強く感じることができる工事でした。では、具体的にどのようにして現場を作り上げていくのか。それは、補助監督員と発注者、請負業者が何度も協議・改善を繰り返すことで実現しています。そもそも補助監督員とはどういう立場の人達なのか簡潔にご説明すると、地域を取り纏め今後の方針を決める組合員、いわゆる地元耕作者の代表の方々です。「より一層農業がやりやすいように」、「より一層安全に住民が暮らせるように」という思いを持った補助監督員の方々の熱意には、何度も胸を打たれました。また、話し合いを進めていく中で、現場の改良点に気づき、耕作者からのご要望に沿うなど、補助監督員からの提案で救われたことは幾度もあります。事実、我々が施工する期間は渇水期であるため、曲がりの角度が急な用水路法線を計画し施工をしても、水量が少ないため越水の危険性を予知できませんでした。しかし、補助監督員からの助言により、出水期の水量を考慮し、曲がりを以前よりも緩やかにしたところ、出水期になっても越水することなく、近隣住人への被害を防止することができました。こうして企業と地域が一丸となり、より良いものを作り上げていく、勿論その過程では意見の衝突や解釈の不一致など、数多くのトラブルもありました。現場が無事終わりを迎えられたのは、関係する方々の思いや繋がりがそこにあったからだと身に染みて感じました。そして、完成し整備された土地は人々を生かし、命を繋ぐものであると、私はその時実感しました。

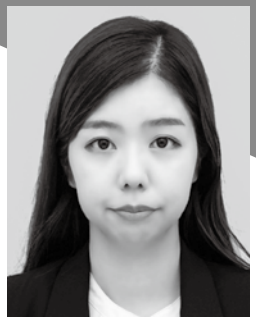
二つ目に繋がりを感じたのは、インフラを支える現場を担当した時のことです。そこは宇都宮市と芳賀町に新たに開通した次世代型路面電車、ＬＲＴが走行する高架橋を建設する現場でした。当時、入社二年目の私はインフラを支えるということやその重要性について全くの無知で、ただ受注したものを図面通りに作ればいいと、そう思っていたのかもしれません。しかし、それは大きな間違いでした。多くの企業が協力・連携し合うことで、町や人々の生活を支えることができる、それこそが建設産業の本質だと先輩方の背中を見て学びました。

またこの工事は、交通インフラの改善や公共機関の利便性の向上、地域経済の活性化を目的とし、ＬＲＴの開通のために数多の企業が力を注ぎ、宇都宮市と芳賀町のインフラを支えようとするものであり、何一つ、誰一人として欠けてはならないものだと改めて思い知らされました。そして無事に竣工を迎え、きたる２０２３年８月２６日、ＬＲＴ開通の日。全線新設は国内初となるＬＲＴは、たくさんの人を乗せ宇都宮市と芳賀町に、なにより栃木県に多くの笑顔と希望を運んできてくれました。今でもＬＲＴを見て喜んでいる通行人や車内から街並みを眺めている乗客を見ると、自然とこちらまで嬉しくなると同時に、この工事に携われてよかったと心の底から思います。しかし、私が貢献できたことは限りなく小さなことです。誰かに気づいてもらえるわけでも褒められるわけでもありません。ただ、その小さな積み重ねが、違う他の誰かの頑張りに繋がり、結びついて大きな力となって、未来の礎を築き上げていくのではないでしょうか。そして、他の誰でもない私たちが、更に後世に繋げ育んでいく。きっと、今までの歴史も同じように紡がれてきた一つの繋がりなのだと私は思います。

以上、二つの事柄が「繋ぐは命、繋ぐは未来の礎」という題名を付けるに至った経緯になります。建設産業と地域の繋がりは密接に関わっており、お互いが手を取り合い助け合っていく。それが本来の姿であり、企業が目指すべき形だと私は考えます。そして、これからの建設産業を担う者の一人として、精一杯、この仕事に尽力し、次の世代へと受け継いでいきたいと思います。

## 不動産・建設経済局長賞

# 建設ディレクターがつなぐ未来



高島（たかしま） 菜央（なお）［株式会社香山組 / 兵庫県］

「変われるか?」この一文が、私を強く突き動かした。「建設業界の2024年問題」ともいわれ業界を騒がせていた、時間外労働の罰則付き上限規制の適用が、あと一年後に迫っている頃のことだった。

当時の私といえば、入社して二年が経ち、建設業の課題を目の当たりにしていた。人々の暮らしを守り、地域社会や経済活動をつなぐ彼らは、社会的に必要不可欠な存在と言われている。それに応えるように彼ら自身も積み重ねてきた経験と強い責任感を持って、昼は現場を守り、夜遅くまで書類を作成するという働き方を連綿と続けていた。ともすれば長時間労働は慢性化し、疲弊した彼らが建設業から離れていく姿を幾度となく見てきた。その背中を目の前にして、彼らを助けたい、建設業で働くことを諦めないでほしいと思う一方で、土木の「土」の字も知らなかった当時の私にはこの状況を変えることができないと、いつしか「不可能」の眼鏡をかけて見えないふりをしてしまっていた。そんな時に一つの新聞記事と出会う。そこには、冒頭の一文と「建設ディレクター」という新しい職域が紹介されていた。その記事を読んだ時、私の不可能の眼鏡は簡単に外され、「自分はなぜ建設業で働くのか」という問いに、答えがでた瞬間だった。

彼らは、当たり前の日常を支える仕事に誇りを持っている。工事完成というゴールに向かって、現場業務に加えデスクワークまで全て技術者だけで完遂させ、次々に出てくる新しい技術を一から学び続けている。その多すぎる荷物の中から、私にも持てるものを探すために、私は彼らを理解するところから始めた。そこから、私の制服は作業服になった。どんな風に一日が始まり、工事完成に向けてともに働く仲間と何を話し、どんなことを大切にしているのか。知れば知るほど、自分にも持てる荷物がたくさんあることがわかった。建設業で働く技術者のイメージを聞くと現場で働く姿をあげる人が多いが、実際のところは彼らの業務のうち、およそ6割は書類業務が占めている。建設ディレクターは彼らをその書類業務から解放し、ICT業務なども担うことで現場を支援するために生まれた、建設業における全く新しい職域である。それまで営業事務として書類作成業務を専門に携わっていた私は、その経験を活かし早く正確に書類を作成することで少しずつ業務を引き渡してもらうことができた。次第に彼らの荷物が軽くなった時、今まで手が回らなかった次世代の人材育成や重要な現場業務に集中することができるようになっていた。

技術者である彼らと建設ディレクターである私の経験がつながったことで、建設業と地域のつながりを生むこともできている。長時間労働と並び、担い手不足は建設業において叫ばれて久しい課題である。世間では3Kというネガティブなイメージが浸透してしまっているが、建設業は変わりつつある。何よりも、技術者の近くで見てきた私だからこそ伝えることができる建設業の魅力や、職人たちの技術を伝えなくてはならないと思った。そこで私は、建設業の魅力を肌で感じてもらい将来の選択肢のきっかけとなるよう、現場見学会や地域でのイベントを企画し、幼稚園から小学生、高校生など幅広い年齢を対象に進化している建設業に触れてもらった。建設業の魅力に触れた彼らは、見学会の後も現場事務所に遊びに来てくれるまでになった。中には技術者を支援する私の仕事に興味を持ってくれる学生もいた。

「技術者」と「建設ディレクター」がつながり、「建設業」と「地域」がつながる。人と人との経験がつながることで、建設業で働く喜びや、ものづくりのやりがいを得て共有することができた。それだけではなく、建設業に触れてこなかった人にもその魅力を伝えることができている。

この繋がりが途切れることがないように、誰もが自分らしく長く働き続けられる建設業を目指して、私はこれからも彼らの、そして建設業と地域の架け橋でありたいと思う。

これが私の建設業で働く理由だ。

## 不動産・建設経済局長賞

# 「当たり前」を繋ぐもの

塚原 慶心（つかはら けいしん）［株式会社神崎組 / 兵庫県］

約8年前、地元広島を離れこの業界に飛び込んだ。今ふと、なんの先入観もなく地元広島を思う。現在広島駅は大規模な駅ビル再開発計画が進められている。

駅ビルに直結する路面電車の延伸、南向きの大通りを正面に見る大階段。そしてそれらを取り巻くホテル、商業施設、シネコン（複合映画館）、これらは地方中心地の顔となる洗練されたデザインで、地方都市の顔として決して劣ることない唯一無二の施設の開業が胸を躍らせる。

そしてまた一方で、建設業に携わってきたからこそこれらの状況について思うこともある。それは「これらの施設は建設業に関心のない人達の生活さえも自然に便利に豊かに出来る」ということだ。いろんな仕事がある中で、建設業のように何の関心を持たれずとも、特に恩恵があると感じられずとも、人々の生活に自然に溶け込み、社会を便利に豊かにすることができる仕事は他にない。

一般的に「工事」に対しての印象はきっとこうだろう。「騒音がうるさい」、「交通規制で渋滞が起こる」、「何の工事をしているの？この工事必要なの？」等々。

誰だってそう思ってしまうのだが、生活を豊かに便利にしているはずの建設工事がなぜそのように受け止められるのか。それはきっと現在の社会が豊かで不便ではない「当たり前」に溢れているからだろう。しかしその「当たり前」を苦労して創り上げることにこそこの業界の魅力があることも確かだ。

平坦なきれいな道路がある、雨風をしのげる建物がある、蛇口をひねればお湯が出る、怪我をすればすぐ近くの病院に行ける、などそれらすべては生活に溶け込めば「当たり前」のものばかり。だが、その「当たり前」を常に創造し、また次の新しい誰かの「当たり前」を生み出し、そして多くの人々の生活を便利に豊かにし続けるのが建設業なのである。

この業界に携わり、生まれ育った町を見る角度が変わった。建物、施設、道路からそれらの意図や想い、またその町の文化や歴史の色が表れていることを感じるようになった。

穏やかな瀬戸内海に多くの筏が浮かび、連なる。クレーンの付いた船がいくつも停泊する海辺に建ち並ぶ牡蠣小屋。自分にとってはほんの当たり前の景色。だがそれらは名産の牡蠣を生業とする人たちのことを考えて計画された建物、道路、港であった。知らぬ先人の仕事のおかげで自分の町の生活基盤が整えられているのだ。その人にとっては多くある仕事のうちのたった一つだったかもしれないが、今確かにその上に自分たちの生活が成り立っている。そしてふと思った。今の自分の仕事も、この先知らない誰かの、そして多くの人の生活基盤となるのであろうと。騒音や交通規制、近隣にご迷惑をかけながら工事を進める。しかし今引く現場の工程線は、これから先きっと見知らぬ誰かの暮らしに繋がっている。そう思えた。

ただ魅力に溢れるばかりではない。日々追われる業務、残業時間の抑制、職人不足、材料高騰等、今後新たな問題や不安が募る。先人たちが費やした時間で得た知識、技術、経験は働き方改革が推進される限られた時間の中で、一体どう埋め合わせができるのだろうか。失敗して仕事を覚えるということが難しい時代。技術職の人材も確保しなければならない。今、建設業はまさしく時代の転換期、改革の時である。新たな工法、技術の発展のみに頼らず、技術の伝承やマニュアル化等、新たな工夫が求められる。先人が今の生活を「当たり前」にしてくれたように、我々は後世にも新たな「当たり前」を残さなければならない。だが、計画者、工事責任者、職人などの名前がそこに刻まれるわけではない。街を歩けば目にする工事現場も、ふと気が付けば終わっている。多少のご迷惑を伴いつつ、我々は今日もそんな仕事を進めていく。

迷惑顔で目の前を通っていくあの人も、舗装後のきれいな道路、便利な施設を利用すればまた少し豊かな「当たり前」を手にしてくれるだろう。誰かに感謝されるわけでもなく、自己満足かもしれないが、必ず誰かの生活に少しの便利と豊かを与えることができる。そして、そんな自分たちの生活をこの先また誰かが便利で豊かにしてくれる。その気持ちと思いがあれば、また今日も頑張ろうと思える。そんなふうに想いながら、今日も当たり前のように誰かの「当たり前」に繋げるように工程線を引いていく。

2024 ESSAY CONTEST

## 優秀賞

# ㎜（ミリ）の世界で生きる

尾形 蓮（おがた れん）［丸か建設株式会社 / 宮城県］

私がこの会社に勤めてから８年が経ちました。高校を卒業してからすぐに就職をし、様々な建設現場に携わり施工管理をしてきましたが、まだまだ一人前と呼べる実力には程遠く、日々現場のベテラン達に学ぶ毎日であります。

そんな私ですが、この建設業界に携わり、その道のプロとして仕事をする上で特に大切にしていることが１つあります。それは様々な工種における施工精度の確保です。

建設業における施工精度は、ほとんどの場合でミリ単位での精度が要求されます。中でも建物の構造や仕上げに関わる部分では特に高い精度が要求され、その建物の出来映えに関わる為、繊細な管理が必要になります。

これは私が入社して間もない頃の話ですが、建物の基準となる墨出しを行った時に3㎜程度のズレが生じてしまい、その当時の私は、たった3㎜程度のズレならば大丈夫だろうと思い自信満々で上司へ終了報告をして指導されたことがあります。その時上司からは、「この基準墨のズレは、今は3㎜だが最上階に行けばとても大きなズレになる。このズレが原因で建物が建たなくなったり、予定通りに工事が進まなくなり、この工事に関わる沢山の人に迷惑を掛ける事になる。その原因を見過ごすことは、俺には出来ない。それにこれを見過ごせば君自身がいい加減な人に育ってしまうので見過ごせない」と言われました。この出来事が今も私の中で印象に残っており、建設業におけるプロとしての在り方についてのベースとなっています。

このミリ単位での管理は、建設業全体の共通事項だと私は考えていて、とても誇らしいこだわりだと思います。施工管理をするゼネコン職員はもちろんのこと、実際に施工する下請負業者の職人の中にも、自分の仕事にプライドを持ち仕事をしている人が多くいます。

よく現場では、「仕上げの墨が1㎜曲がっているから打ち直してくれや」、「あっちとこっちで、床の高さが2㎜くらい違うから歩いた際に違和感があるぞ。仕上げの前に直しておかなくていいのか」など、意見が飛び交います。実際の施工管理基準としては、許容範囲内での施工なので、問題無いとの判断になるのですが、このプロとしての意識の高さにはいつも刺激を受けていて、私自身も見習わねばと日々意識させられています。

世の中ではたいしたことが無いように思えるミリの世界ですが、私たちの働く建設業界ではこれがとても重要な事であり、ときにこの数ミリが致命傷になることもあります。

このような繊細で緻密なミリの世界で私たちは日々仕事に励んでいます。

世間一般的には建設業界で働く人は、ガラが悪くていい加減な人が多くいるのではないかという良くないイメージが多々あると思いますが、実際に現場で働いている人はとても繊細であり、責任感を持った真面目な人が多くいると私は感じています。また実際の現場での作業や管理の状況を知ってもらえば世間の悪いイメージは無くなるのではないかと思います。

世の中で建設業が少しでも良いイメージを持ってもらえるよう、これからもこのミリの管理を大切にしていきたいと思います。

2024 ESSAY CONTEST

## 優秀賞

# つながりの輪

小松 秀徳（こまつ ひでのり）［熱海建設株式会社 / 宮城県］

3月下旬。桜が咲き始める頃、工事は無事竣工を迎えた。

「1年前と比べると大違いだよ。みんなで見ていて色々と大変だっただろうねと話していたけど、きれいに整備してくれてありがとうございます。」

私は数年前、とある河川の築堤工事に携わっていました。河川堤防付近は県道や民家に面する箇所が多々あり人の目に付きやすいようなところでした。

施工前の現地踏査を行った時の事。サイクリングやジョギング、散歩を楽しむ方々から声を掛けられることが度々あったのですが、ほとんどの方が現在の堤防に関し多くの要望を持っていました。

「夏になると草が生い茂り前が見えにくい」

「人と自転車がすれ違うのには狭すぎる」

確かに堤防天端は狭く既設舗装は起伏が激しかったのを覚えています。

数週間後。施工に伴い工事説明、挨拶を行いに地域の区長さん、近隣住民の皆さんに伺った時の事です。堤防の修復を今か今かと待つように誰もが口をそろえて言っていました。「今の堤防がこうなるのか楽しみだなぁ」と。私は期待に応えるべく良いものを造れるよう頑張ろうと思いました。

それから間もなくして工事が始まりました。現場内では重機やダンプトラックなどが行き交い、我々が普段目にするいつも通りの騒がしい現場の風景となりました。

ある日の事です。その日は朝から暑く外には一歩も出たくないような日でした。現場で測量を行っていた時の事。堤防の上から二人組の親子が声を掛けてきました。「暑い中ご苦労様です！ちょっといいですか！」と。正直、このような形で声を掛けられるのは初めての事だったので驚いた半面少し嬉しさもありました。親子の元へ駆け寄り話を聞くと、

「どんな工事をしているの？」

「あの重機は何に使うの？」

などといった内容で私は一通り説明を行いました。それからその親子は竣工までの間、毎週決まった時間に現場を見に来るようになり私は、進捗状況を説明するのが日課となっていました。進捗が進むにつれ「建設業にだんだん興味が湧いてきました！」と言われた時は嬉しかったのを覚えています。

月日が流れ3月下旬。完成検査も終わり現場の状況を確認する為、私は堤防天端を歩いていました。すると、いつも見に来てくれていた親子が偶然散歩に来ており雑談を交えて一緒に歩きながら話をしました。帰り際に言われた感謝の言葉は今でも胸に残っています。

後日談になりますがその親子は職場や学校などで私が担当していた工事現場の話をする機会があったそうです。周りの人たちに伝わったかどうかは分かりませんが地域住民の皆さんとの交流、つながりを通して少しでも建設産業に魅力・興味を抱いてもらえれば良いなと思いました。

言葉や文章では上手く表すことができないのですが地域住民の皆さんとのほんの些細な時間ですが会話をすることにより親近感が湧くというか。温かみを感じるというか。とにかく何かのつながりが生まれたと私は思いました。

この経験から私は地域とのつながりや関わりを今よりも大切にしていこうと思ったのは紛れもない事実です。よく工事看板で目にする「工事中につきご協力お願い致します」。建設業に携わる我々は何気なく見ている日常の風景かもしれませんがまさにその通りだと思います。

地域住民の皆さん、一般の通行車両の皆さんの理解を得ない限り不満は募り、苦情が殺到するばかりで私たち建設業の仕事は成り立ちません。いかにして理解をしてもらうか、ご協力してもらうか。

些細なことでもいいのです。少しずつ地域住民の皆さんと関わりつながりあうことが重要だと思います。「塵も積もれば山となる」という言葉のように、地域住民の皆さんとすれ違う際は元気よく挨拶する。質問などされた時は誠意をもって対応する。小さなことでもそれを積み上げていくことにより信頼が生まれ、つながりの輪が広がり人から人へつながっていくのではないでしょうか。

最後になりますが、これから先私は数多くの現場を担当することとなります。今回経験した事を意識しながら地域の繋がりを広げ、より良いものを造れるようこれからも精進して参りたいと思います。

2024 ESSAY CONTEST

## 優秀賞

# BIM/CIMで繋ぐ現場と地域

髙橋（たかはし） 一志（かずし）［株式会社香山組 / 兵庫県］

「結局何作ってるんやろ」「分からんけどなんかの建物やろ」夜遅くまでアルバイトをした帰りに迎えに来てくれた母親と工事現場の横を通った時の会話です。無機質な仮囲いにただ掛けられている建設業の許可票と、書かれている工事名や図面、当時は全く気にもならない、興味もなかった風景でした。しかし、この業界に入ってから、施工している工事の目的や工期内に竣工するための施工管理者の工夫等を聞いていると、一つの工事にはたくさんの人の思いや、熱意があることを知りました。そんな時に当時の会話がふと蘇りました。施工管理者や発注者の方たちは地域の為にここまで考えて仕事をしているのに、地域の方にはどうしてあまり伝わっていないのだろう。昔の自分と母親のように工事のことを気にしない方には興味を持たれず、神経質な方たちには自分の生活に悪影響が出ると文句を言われてしまうこともある。応援してくれる方はごくわずかで、このような現状はあまりにももったいない。それどころか現場で働いてくれる方たちがあまりにも浮かばれない、そのように感じました。入社して間もない新入社員の私は、業務で作成しているBIM/CIMモデルをどのように使えばいいのかも分からない、あまつさえ現場で働いたこともない本社勤務の人間、そのような考えからか、自分にできる事はないんじゃないかなとさえ思っていました。

少し仕事に慣れ始めてきた頃に、「こんなん作ってるねん」と言って、自身が作成したBIM/CIMモデルを母親に見せてみました。すると、「へぇーこれやったら何作ってるか分かりやすいやん」と言われ、同じことを現場周辺の方に見てもらえたら工事に興味を持ってくれるかもしれないと思い、構造物だけでなく、作業内容も全てモデル化して工事の流れが分かる施工ステップ動画を作ってみようと考えました。まず初めに、施工計画書を見ながら試行錯誤で施工ステップ動画を作ってみました。

しかし、社内の技術部の方に動画を確認してもらうと「全然違う」と言われてしまい、自身の工事や現場に対する知識の乏しさを痛感させられました。「自分一人では絶対できない」とも思ってしまいましたが、一度やり始めたからには絶対形にしたいという思いから、最初に動画を確認してもらった技術部の方や、現場代理人に分からない事を全て質問し、四苦八苦しながら一つの動画を作りあげ、現場で放映していただきました。つかみは上々で「分かりやすい」「勉強になった」「工事って必要なんですね」など工事に対する理解を得ることができ、発注者からの評判も良く、これは成功したと思いました。その時に発注者から「字幕にふりがなを振ってほしい」という要望がありました。最初は「なぜ？」と思いましたが理由を聞くと、「この付近ではよく子供たちが通るが、今のままでは難しい漢字が使われているので読めないと思う」と言われて、はっとなりました。工事の内容を完全に再現する事に躍起になっていて、動画を見る方は大人だけでなく、小さな子供、視力が低下したご年配の方など様々な方への配慮が欠けていたことに気づかされました。それと同時に、まだまだ改良する余地があることに気がつけたため、内容だけでなく、見てくれる方のことも考えて動画を作成するようにしました。最初は漢字にふりがなを振り、読む事が困難な方たちの為に、AIによる合成音声を使い、字幕の内容を読み上げさせました。また、現場の工事内容だけでなく、その事業が完了した後のイメージ動画も作成するなど、たくさんの改良を加えていく内に現場や地域の方から「分かりやすいので教育にも使えそう！」や、「工事をしてもらって助かる」などの声が次第に増え、私の仕事が現場と地域を徐々につなげる事が出来ていると実感できました。

現在は現場周辺の方だけでなく、様々な方に動画を見てもらい建設業に興味を持ってもらうため、YouTubeに動画を上げる取り組みも行っています。いまだに、建設業と地域のつながりは弱いと思います。ですが、自分の作成した動画で、あの晩、母親とした会話を「結局何作ってるんやろ」ではなく「こんなん作ってるんや！」、「分からんけどなんかの建物やろ」ではなく「こういう問題を解決するために、この構造物を作ってるんやで」と変えられるような、工事に対して理解してくれる、興味を持ってもらえるような方を一人でも多く増やしていければと思っています。この小さな積み重ねがきっと建設業と地域をつなげる第一歩になると考えています。

2024 ESSAY CONTEST

## 優秀賞

# 付加価値を高める

長濱 祐希（ながはま ゆうき）［株式会社森長組 / 兵庫県］

私は建設現場で監理技術者として多くの工事に携わってきました。これまで様々な協力業者の皆様に助けられて今日があると断言できます。建設業では大きく分けて技術職と技能職があるが、そのどちらにも職人（プロ）は存在するし、こだわりも存在していると思います。

入社一年目の頃に淡路島で鋼管矢板を圧入する工事を担当したことがあるのですが、着工前の現場は砂浜であったため車両の入退場、材料のストックが行えるように工事用道路を設ける必要性がありました。私はこの時、鉄板を敷設して終わりぐらいにしか考えていなかったです。しかし実際の施工は砂浜を一定の高さで整地し、鉄板の割りや方向線を現地に記し、慎重に丁寧に鉄板を設置する上司と職人の姿がありました。今では当たり前の準備ですが、私は衝撃を受けました。終われば撤去してしまうものに対して注力していることと仮設に対する熱量が全員同じだったことに対してです。臆病な私は上司ではなく協力業者にこっそりこんな質問をしました。「どうして仮設に一生懸命になっているのですか。」少しキョトンとして間をおいてから「人の家に行ってトイレが汚いと何とも言えん気持ちになるやろ。」それを聞いて今度は私がキョトンとしてしまったが、仮設工が完了する頃にはその意味が分かりました。工事そのものが映えたのです。まるでその仮設が一つの発注された現場であるかのような印象を受けました。また、その後の工種の出来栄えにも影響していました。少し期間を置いてから、その時の上司には「仮設こそ本腰を入れろ。そこで躓く現場は、綺麗な現場や成果品は上げられない。」とご教授いただきました。

もう一つ印象深かったのが、見えない部分に対するこだわりです。不可視部分の写真撮影などの管理は必要不可欠ですが、こちらから指示せずとも職人の皆さんには「見えない部分であっても手を抜かない。」という感覚や意識が備わっていたのです。これは発注者や元請から信頼を得るためであることはもちろんですが、それ以前に会社や職人個人のブランドを守っているように私は感じました。企業理念や社訓などで定められている会社でなくとも職人の経験則から来るこだわりを何度か目の当たりにしました。基礎コンクリートの打設時や、土中の鋼管矢板の変位、鉄筋組立時の緻密さ。例を挙げればキリがないが、直感的且つ本能的に職人は場面や条件に応じて納得出来るラインを個々が引いているように感じました。

監理技術者である私自身にだってこだわりはあります。職人のこだわりに対して最大の敬意を払う必要があるのと同時に最大のパフォーマンスで仕事が出来るよう、現場環境を綺麗に保つこと。そして技能職の考えや要望を汲み取って仕様書を精査し、発注者と打合せを密に行い、承諾を得ることも重要です。ただ単に発注者や協力業者の言いなりだと、存在意義が無く面白くない。総合的に現場を管理する立場であるからこそ気付けることを出し惜しみせずにぶつけていく。すると何度かやりとりを繰り返すうちに不思議と信頼関係が濃くなる。あの感情は機械と仕事をしたのでは生まれません。建設業におけるこだわりとは人間らしさが良い意味で露呈します。

今、私が記したことに対して「こだわって何がしたいのか。」という疑問を持つ人がいるかもしれない。私もこの業界に入るまでは分からない感覚でした。若いながら出した答えは至ってシンプルであり「付加価値を高めたいから」だと私は思います。付加価値は、お金では表すことができない人間の本質のような部分だと思っています。こだわるということは個人の技能技術向上、会社としての企業価値の向上、もっというと業界そのものの価値にまで影響を与えるものだと考えます。職人は仕方なくこだわっている訳ではないのです。定められた規格や品質を守ることは当然であって、そこから経験と知識で工夫してより良いものを創造しています。各々の会社が技能や技術の伝播、継承を行っていると思うが、こだわりという付加価値の継承も行われているからこそ、会社として存続出来ているのかもしれないです。土木とは経験工学であるという教えを受けたことがありますが突き詰めると「こだわりの継承」のことを指すのだと私は思います。

# 建設産業人材確保・育成推進協議会

# 令和６年度
# 高校生の作文コンクール

## ■趣　　旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、将来の進路として建設産業を考えている高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象に、建設業への思いや建設業を進路に考えるようになったきっかけなどを広く伝えていただく場として、作文コンクールを実施し入選作品による作品集を多くの方々に届けています。

「高校生の作文コンクール」は平成25年度から実施し、今回で12回目となりました。

## ■募集概要

応募資格　高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒
応募期間　令和6年5月7日(火)～ 6月28日(金)
応募テーマ　建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。
　　建設産業についての私の思い　又は　日々の学びと私の夢
応募総数　952作品

## ■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。
[作文コンクールWEBサイト]
https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html

## ■選考委員

古阪秀三　立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員教授
　　建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
城　麻実　国土交通省 不動産・建設経済局 建設振興課長
上田国士　(一社)全国建設業協会 業務執行理事
樋脇　毅　(公社)全国鉄筋工事業協会 常任理事
奥地正敏　(一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事

# 国土交通大臣賞

# 笑顔のあるコミュニティ再生を、建築の力で

鈴木（すずき） 和弥（かずや）［静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年］

私の夢は、世界の人々に自分の居場所、帰る場所「自宅」を作ることだ。そして、「自宅」で囲まれたその街に、幸せが溢れかえるようにする事だ。

私はフィリピンで生まれ、幼少期を貧しい田舎で過ごした。私は恵まれていたのだ。ありがたいことに自宅があり、普通の生活をしていた。食べるところや寝るところ、シャワーを浴び、くつろげる空間が、そこにはあった。しかし周りを見渡せばダンボールの上で寝て、ダンボールの上で食べ、雨風も凌げないような人達が多くいた。家はあっても簡易的に作られた小屋のようなものしか無かった。バラックのような家が広がった街ではゴミが散らばり、治安は悪かった。景観は荒れていた。一体誰がこの街で分かりあい、幸せを感じて過ごすことができるのだろうか。

私が日本に来たのは5歳の頃だった。幼い時に見た、フィリピンの荒れ果てた景色とは違い、景観や街に住む人達の姿を見て感動したのを覚えている。みんなこの景色を当たり前のように見て過ごしていて、日本の建築物のクオリティの高さに驚かされた。そしてこの光景を作り出しているのは、当たり前に日々を過ごし、当たり前に帰る。そんな「自宅」、「街」があるからこそ、みんな幸せそうに笑っているのだと感じた。その日から私はいつか世界中の誰もがみんなが幸せになれるような「自宅」「街」を作ることが自分の目標になった。

私は今、高校で建築を学んでいる。構造から材料、建て方や景観まで自分の夢を叶えるため日々建築の基礎から一つずつ力を身につけている。建築の奥深さに触れ、色々な違いにも気付かされた。日本と海外では大きく建築物の特徴に差があった。気候が違えば使う材料が違うし、考え方や文化が変われば、建物そのものが、街や地域それ自体が変わってくる。建物を建てる時の費用の大きさにも驚いた。今のままでは貧しい人達には到底「自宅」は作れないことを知った。建築一つにも違いがあった。同じ建築物で全ての人に幸せになって貰うことは出来ないことに大きく気付かされた。そして自分の夢がどれだけ大きいかも気付かされることになった。それでも私はこれからも建築を学んでいく。地域にあった建築物を建てるために、貧しい人達に帰る場所、住める街を作るために。いつかみんなが楽しく不安のない、幸せな日々を作るために。街の治安や人が幸せを感じられること、みんなが笑顔でいられること。それが建築から始まっていることに気付いた日から、私は学びを止めない。

私はまだまだ未熟である。建築に対する知識も経験も遥かに足りない。私は大学に進学し安く耐久力に優れた構造、海外の建築文化、海外の歴史や特色について学ぼうと思っている。これからも建築に触れ合い、深めていきたい。私の夢が叶うまで、いつか世界の全ての人に自宅と住まう街ができるまで。

## 不動産・建設経済局長賞

# 笑顔を届ける大きな夢を叶えたい

尾﨑（おざき） 里緒奈（りおな）［静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年］

私の将来の夢は大工になることだ。小さい頃からものづくりが好きで、レゴブロックで街や家具を作ったり、段ボールで家を作ったりと、想像力を膨らませて工作をしてきた。そんな私にとって、将来はものづくりを職業にしたいという考えは自然なものだった。

大工を志した契機となったのは私の家を建てる大工さんに出会ったことだ。丁寧な仕事ぶりで、家を建ててくれた大工さん。その大工さんの一挙手一投足から目が離せなかった。この頃から大工の姿が映るテレビ番組に夢中になっていった。特に、大工に工事を依頼した人が、完成した建物を見て、華やかな笑顔に変わって喜んでいる姿が印象的だった。成長していくうちに、私もいつか誰かの夢を形にするような家を作り、誰かを笑顔にできるような大工になりたいという夢が大きくなった。

建築を学ぶ前は、建築は簡単だと思っていた。しかし、実際には想像以上に建築は奥深いものだった。建築を学び始めると、それまで建築には関係ないと考えていた社会や理科で学んだ知識が必要になり、難しい計算も必要だった。また、複雑な図面を読み解き、高度な技術によって、安全で快適な建築物が生まれていることを知った。さらに、多くの道具や機械を使いこなす必要もあり、木材の種類や特性を覚えることも求められた。特に、今まで扱ったことのない大型の機械は危険と隣り合わせだった。遊び半分や油断して使ったら、大きな怪我をしてしまう。そのため、緊張感を持って安全に作業する技術を身に付けることが重要であることを学んだ。想像を超える難しさに戸惑いながらも、一つ一つの課題を乗り越えることで、建築の奥深さに触れ、やりがいを実感している。

私は今、未来に向けて、猛勉強をしている。建築は簡単では無いと分かったからだ。誰かを笑顔にできるような大工になるのは、さらに難しいのだろう。それでも、私は諦めたくない。一級・二級建築士の取得を目指し、日々の努力を積み重ねている。単なる知識だけでなく、技術も身に付ける必要があるから毎日が充実している。

私の夢は、人々の暮らしを支え、笑顔を生み出す「大工」になることである。そのためにも、日々努力を続け、建築の知識と技術を磨き、地域に貢献できるような大工を目指していく。憧れの大工の仕事も、決して楽ではないだろう。しかし、完成した家を見た施主の笑顔を夢見て、努力を積み重ねていく。いつか私も、誰かの夢をカタチにするような家を造り、笑顔を届けられる大工になりたい。

## 不動産・建設経済局長賞

# 承前啓後

望月（もちづき） 実来（みこ）［静岡県立科学技術高等学校 建築デザイン科 1年］

私の住む「蒲原」は、江戸時代に旧東海道の宿場町として栄えた街だ。小さいときから歩いた街並みは特に珍しいものとも思わず、ただ毎日を過ごしていた。

私が見ているのは私にとって「当たり前」の景色だった。その考えが覆されたのは、小学校六年生の時、自分の地域について調べ学習をしたことがきっかけだった。そこで私は意外な事実を知ることとなる。約一キロメートルの間に江戸時代の旅籠や商家、郡中惣代の資料が保存された蔵、明治、大正期のお菓子屋や歯科医院として使われた洋館など国登録有形文化財や市指定文化財が多く存在し、元宿場町としての形が多く残っていることを知った。例えば、道一つ取ってみても、当時の道幅のままであったり、かつての生活を支えていた細道「背戸の道」が残っていて、現在も地元の人たちに使われたりしている。

「蒲原」は、多くの歴史的建造物と現代の建造物が混じり合い、中和した街なのだ。

そんな素晴らしい建築物の数々も、残そうとしなければ廃れてしまう。

蒲原に住んでいる多くの地元住民は、かつての私がそうであったように、その魅力に気づけていないのかもしれない。

しかし、なかには、この街の魅力を引き出すために活動してくれている地元の方々だけでなく、この街のたくさんの魅力に気付き、発信してくれている移住者の方々もいる。

例えば、この街の宝の持ち腐れとなってしまっている多くの建築物を改装し、商売に活かせるようにしたり、移り住んで守ってくださったりしているのである。その方々との出会いが私に「この街を守りたい」と強く思わせ、まだ私自身も知らない「未見の我」を知るための道に進む大きなきっかけとなってくれた。

私はこの街を恋い慕う人たちと多くの建築物の美しさと街に残っている遷移に魅了された。私は、この素晴らしい街の景観を守るために歴史的な建築の保全と後世に残すための知識と技術を身につけていきたい。そのために高校から建築を学び、基礎を固めている。製図の技術だけでなく、木造加工の技術も身につけることで、建築を学んでいるからこそ知ることのできた木造建物の真の良さを伝えていきたい。

また、かつての華やかさが垣間見える建築物を現代でも使いやすく、住みやすくすることで、その数々の建築物の価値を更に高めたい。そして、その建築物がより身近な存在であり続けるように工夫を凝らし、後世につなぎたい。更に、「蒲原」の街並みがこの先も続くような取り組みに積極的に参加していきたい。

私の住むまちは「特別な町」である。

## 不動産・建設経済局長賞

# 百年後をつくる

笠原（かさはら） 陸（りく）［岡山県立岡山工業高等学校 土木科 3年］

―「二十年後、三十年後、立派な土木技術者になります。」―

これはある方に誓った言葉です。

私は、百年後も人々が安心して暮らすことのできる社会を造っていきたいという思いを持って「岡山道路パトロール隊」という活動をしています。この活動は、高校生「学」が社会インフラである道路の巡回を行って、安全性や老朽化などを点検し、建設会社「産」、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所「官」と連携しながら、地域の道路の現状把握からメンテナンスまでをスムーズかつスピーディに行うというものです。

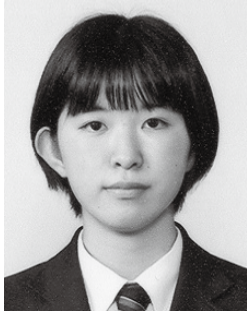
私は、この活動を通して、道路インフラの老朽化が進行していることを目の当たりにしました。例えば、岡山発祥である点字ブロックのがたつきを見かけると、これで目の不自由な人はほんとにつまずくことなく歩けるのでしょうか。インターロッキングブロックの陥没で高齢者や子供たちは危ない思いをしていないのでしょうか。視線誘導標が破損している道で、車は本当に安全に走行することができるのでしょうか。などと考えます。これを放っておくと、百年後はおろか、十年先も安心して暮らせる社会はつくることができません。私がこの活動に取り組むことで、地域の人々が危険な思いをしなくてすむのではないか、そう思うと大きな責任を感じ、さらに真剣に活動するようになりました。そして、私のこの思いをさらに強くする出来事がありました。

第七十四回全国植樹祭で天皇皇后両陛下が岡山へお越しになり、その際、私が学ぶ岡山工業高校にもご訪問頂きました。私は仲間と二人で、岡山道路パトロール隊についてご説明しました。天皇陛下は「どのような所をパトロールされているのですか。」とお尋ねになりました。私は「近くの国道で、道路の陥没や亀裂などがないかパトロールしています。」とお答えしました。また、皇后陛下は説明用のパネルの写真の一枚をご覧になり、「なぜ長さを測っているのですか。」とお尋ねになりました。私は「国土交通省と建設会社に陥没の写真を送るときにその箇所の長さや深さを正確に伝え、速やかに処置ができるようにするために測っています。」とお答えしました。この間わずか三分ほどでしたが、たいへん緊張しました。最後に両陛下から「とても良い活動ですね。これからも頑張ってください。」と温かい励ましの言葉をかけていただきました。お二人の言葉をお聞きし、私たちの地域の活動が全国に発信されて本当に嬉しく思うと同時に、私がこれから土木技術者になって「地域の人の命を守る」という使命があるのだと強く感じたのです。

「百年後も安心して暮らすことのできる社会を造りたい。」これは遠い目標のように見えますが、実は、私たち若い世代が今から少しずつ活動を積み重ね、未来と向き合っていくことで達成できると信じています。そして、二十年後、三十年後、次は立派な土木技術者として、天皇皇后両陛下にお目にかかりたいと思います。

# 不動産・建設経済局長賞

# 未来をつなぐ



野中 心路（のなか こころ）［福岡県立八女工業高等学校 土木科 2年］

私が住んでいる町では去年、豪雨による災害が起きました。川があふれて小さな橋が壊れたり、川岸にあった家の地面が壊れて家が流されてしまっていました。私の家から歩いて一、二分の道路は冠水してしまい、ある友達の家や車、周りは浸水していました。しかし、私の家の前にある小さな溝は、水があふれにくくなるように工事が行われたばかりで、そのときは、足首くらいしか道路は冠水していませんでした。工事前は少しの雨であふれていた溝がここまで変わるとは思っていませんでした。

現在、橋はきれいに直され、車や人が通れるようになり、車で道を通っていても冠水した道路とは思えないほど整備されています。これらは土木によるものだと私は思います。

土木とは、私たちが普段使っている道路・高速道路・橋・ダム・トンネル・鉄道などのインフラを造るだけでなく、災害の復旧工事に携わっています。私は、家が流されて涙する住人や橋が渡れなくて不便な人を目の当たりにしてもうこんなことがあってはいけないと思い土木により一層興味を持ちました。

高校に入学して私は道路や建物を造ることはとても大変であるということに気づかされました。まず設計やその土地を調べることから始まり、その後に造るとするととても時間がかかります。橋となると強固であればいいというわけではなく景観にも気をつけないといけないということを最近知りました。このように私たちの知らないところで土木の人々は活躍しています。人々があたりまえに使う道路や橋、鉄道などは様々な工夫がされています。例えば道路は中央が盛り上がっていて水が中央にたまりにくくなっていたり、橋は荷重のかかり方を考えて造られています。このように、人々の知らないところで活躍している土木はかっこいいと思います。

私は去年の夏、浸水した家にボランティアに行きました。床下の泥や石を運び出す作業が主でした。全ての作業が終った後、浸水した家の方やボランティアの方々には笑顔がありました。このことは土木とは直接なかかわりはないかもしれません。しかし、私は土木を通して人々を笑顔にしたいと思いました。

正直私は勉強が苦手です。ですがあと二年ほどの学校生活で、橋や道路・土などの土木の専門的知識を増やし、土木の測量や施工などの技術面も上達させながら、将来は地元、あるいは他の市町村を見えないところで守り、地域の人々を笑顔にできる土木職に就きたいです。

## 優秀賞

# 未来への扉

大橋（おおはし） 心晴（こはる）［栃木県立宇都宮工業高等学校 建築デザイン科 3年］

私は小さいころからものづくりが好きで、かつあるテレビ番組を見てこういう風になりたいと思い建築関係の仕事に興味を持ちました。また、多くの人の生活が豊かになり幸せになってほしいと思いました。

建築を早く学びたいと思い宇都宮工業高校に入学しました。今までの高校生活で製図やデザイン実践などのデザインから実習や施工などの現場でのことなど普通高校では身につかない様々なことが身についたと思います。

私は建築研究部に所属し、コンペに出品しています。

CADを授業で始める前から仲間と試行錯誤をし、書き方やレイアウトなどを無事に完成させることが出来ました。最初の作品はとても達成感があり心に残りました。コンペの回数を重ねていくうちに、多くの壁にぶつかりました。思ったように図面が書けなかったりレイアウトや色に迷ったり、模型が上手くつくれなかったりしました。その時に感じたのは仲間の大切さです。1人1作品を出すためライバルでもあり協力して完成させる仲間でもあります。これからも仲間の大切さを感じながら頑張っていきます。

2年生の時に学校で職人体験がありました。そこで、骨組となる鉄筋の接合、型枠体験、建物を建てるための足場の組立て、壁を塗る左官体験、タイル体験などとても貴重な体験をすることができました。多くの職人さんがいることで建物が建っていることを再確認することが出来ました。職人さんたちに感謝して生活していきたいです。

職人体験を通じて私に新しい夢が出来ました。それはタイル職人になることです。今までは建築関係の仕事か設計ができたらいいなと考えていました。しかし、多くの職人さんが一生懸命汗を流して働いているところを見て憧れを抱きました。腕を上げて多くの建物に携わりたいです。女性の職人は少ないと思いますがたくさん練習をしてタイルを極めたいです。

この夢のために今頑張っていることがあります。それは多くの資格を取ることです。資格を取るために勉強をすることで今の自分の身にもなり、仕事を始めた後資格を取る際に勉強の習慣がつくと思います。就職した後、技術を身に付けたくさん練習し、より多くの資格を取得したいです。そして、多くの人を笑顔にできる職人になりたいです。高校生活３年間で学んだことを忘れず仕事で生かして精一杯頑張りたいです。

## 優秀賞

# その命を救いたい

土屋（つちや） 瑞季（みずき）［山梨県立甲府工業高等学校 建築科 3年］

私にとって建設産業とは、人々の生活を最も近くで支えている、暮らしの大黒柱だと考えている。これからの将来、もっと便利に生活するために私が建築士となり、これからの未来を創造していこうと思い、日々建築の学習に励んでいる。

私が建築の業界に進もうとしたきっかけは、今から十三年前に起こった、東日本大震災の被害を小学校の授業で学習したことである。そこで見た写真は、当時の私にとって衝撃の大きいものばかりだった。津波によって建築物が流され、倒壊し、沢山の人々がそこに生き埋めとなってしまっていた。このことから、どれだけ丈夫な建築物でも、必ず安全なものなど存在しないのではないかと私は考えた。どのようにしたらもっと安全な建築物を作ることが出来るのだろうか、被害に遭われた人々を救う手段は本当になかったのか、子供ながらに様々なことを考えた結果、自分が建築士となり災害から人々を守れる丈夫な建築物をつくれるようになればいいと強く決意を固めるようになった。それが、私が建築の世界に足を踏み入れたきっかけである。その後工業高校建築科に入学し、これまでの二年間、現在に至るまで建築の設計や構造体について沢山の学習をしてきた。そのため、徐々に小学校の頃から思い描いてきた、災害時に人々の命を守れるような丈夫な建築物をつくりたい、という目標に対する私なりの答えを少しずつ見出だすことが出来るようになってきた。

私がなりたい建築士は災害から人々を救うことができる建築士である。しかし、必ず倒壊しない建築物などこの世にはやはり存在しないと思う。そのため、これからの建設産業を担っていく一人として、私は最大限の力を使って建築の仕事に励んでいきたい。いつかまた東日本大震災の時のような大きな災害が起こった時に、一秒でも二秒でも長く、そこに住む人々を逃がす余裕を持てる建築物を作り出すことが出来る建築士を目指していきたい。

今の私にできることは、日々の建築の学習に高い意識を持って、学習に励むことだ。座学や建築製図などの少し面倒くさいと感じてしまうような科目にも、実際に仕事でどのように生かしていこうかと常日頃から一つひとつの学習に意味を持って取り組んでいこうと考えている。そして、十年後、二十年後、大きな災害が起こった時にでも、建築物による倒壊などの被害で、沢山の人々が被害に遭わずにすむ世界を私たちが建設産業の中心となって創造していきたいと考えている。

## 優秀賞

# 憧れの人を目指して

高桑（たかくわ） 芽来（めぐ）［富山県立高岡工芸高等学校 建築科 2年］

私は、将来建設産業に携わり、人々が今よりさらに安心できるような家づくりをしたい。

私が建築を志したのは、父や祖父の影響が大きい。祖父は元大工で私の家を建ててくれた。父は私が10歳の時まで住宅メーカーで働いていた。身近に建設産業で働く二人がいたが、小さい頃の私の夢はパン屋だった。その夢を建設産業に向けてくれたのは、父である。仕事熱心な父は住宅メーカーのイベントに毎回私を連れて行ってくれた。最初は父と遊ぶ程度の気持ちでいたが、何度も参加するうちに、だんだんイベント自体が楽しくなってきた。会場である住宅展示場では、同じ会社なのにデザインや構造が違う住宅が並び、なんで違うのだろうと思った。家に帰ってから父に、デザインや構造について聞くと、とても分かりやすく、質問に対して倍の情報量で答えてくれた。とても満足したと同時に住宅設計への憧れを抱き始めた。家に対して知識豊富な父に憧れ、建築の知識を最大限に活かして、誰がみてもこの家に住みたいと思える家づくりがしたいと考えるようになり、高岡工芸高校建築科へ入学した。

今年の正月、家族で祖父の家に集まった。コロナ禍が続き、中々親族に会えなかった為、今年は特に楽しみにしていた。しかし、地震が突然やってきた。最大震度7の能登半島地震である。祖父と私の住んでいる地域は震度5強の揺れだった。築51年の祖父の家は地震発生時、家全体からミシミシと音が鳴り響き、照明はぐらぐらと大きく揺れた。父は、柱や筋交いが少ないからすぐ外に出ろと私達に言った。それを聞いた私は、この家が崩れ易いと思い、ただひたすら家から離れることしか頭になく恐かった。祖父が建ててくれた私の家と祖父の家は、祖父が丈夫に建ててくれたおかげで、どちらも棚の中の物が散乱した程度だった。家に大きな被害がなかったのは、祖父が柱や筋交いを適切な位置に配置し、耐震に力を入れて建ててくれたからだ。

この経験から私は、家の安全性について今まで以上に考えるようになった。日本は地震大国だ。だからこそ、より安全性に力を入れなければならない。住宅は住む人の安心や安全を保障しなければ、その役割を全うできないと思う。私は、疲れ切って家に帰ってきた時、すぐに玄関に座って脱力してしまったことがある。今思うとその行動は、この家が安心できるという信頼感からくる行動だったと思う。そう思ってもらえるのは、設計者として嬉しいことだと思う。自分が設計した家を、住んでいる人達が安心・安全な場所として認識してくれているからだ。私も祖父が建てたような、住む人が信頼を置ける家を設計したい。地震で怯えることはあっても、地震で崩れないと断言できる安全性の高い住宅を、私は地震大国の日本に一軒でも多く建てたい。この思いを叶える為、高校では建築の知識を身に付け、祖父や父のように住む人を安全・安心な気持ちにさせられる住宅を設計する建築士になりたい。

## 優秀賞

# 当たり前をつくる仕事

中野（なかの） 歩夢（あゆむ）［金沢市立工業高等学校 土木科 3年］

今当たり前だと思っている生活の裏には、多くの人が汗水を垂らして働きこの世界を作っています。その世界にただ生きているのではなく、人が住みやすく生きやすい世界を作ることに興味を持つことが重要だと考えています。しかし、土木の仕事はしんどいし汚いと思う人も中にはいると思います。それでも私が土木の仕事をしたいと決心した理由があります。

私が現在在校している工業高校の土木科に入学しようと思った理由は、世界のたくさんの人に利用されている道路や橋を自分自身の手で作ってみたいという興味を持ったことと、県内では唯一の土木科があるという所に魅力を感じたからです。私たちの暮らす石川県では他県に比べて地震が起こりやすく、普通の道路よりも強度のあるものを作る必要があると思います。そのために必要な知識を学ぶには私が工業高校に入学する必要があり、自分でたくさん調べて出てきたのが現在の工業高校でした。興味は持っていたけど、最初は勉強についていけるのかという不安や、本当にここで良かったのかと思うこともありました。それでも、私の夢である「地域の方々から感謝される仕事をする」ことを実現させたいという気持ちをモチベーションにここまで来ることが出来ました。そして、約２年半でたくさんの専門的知識や技能を得ることで半年後の就職に向かっています。世界の人々に利用されている道路や橋を作るのには1つの会社だけでなく、いくつもの会社の協力があり作り上げられています。私は当たり前のように道路や橋、ライフラインを作り人々の生活を支える仕事に強い憧れを持っています。それらは人が生きる上で重要な役割を持っています。そんな中、2024年1月1日に能登半島地震が発生しました。毎日当たり前のように通過していた道路が通れない程歪んだり、ひび割れしたりしているのを目の当たりにした時に大きな絶望と強い気持ちが生まれました。日常生活が壊された悔しさと、私たちが暮らしていた綺麗な景観から少し離れてしまったことに対する絶望はとても大きかったです。また、断水や停電により生命に危機的状況が強いられている地域がたくさんあったことは同じ県民として悲痛でした。それでも、綺麗な景観を取り戻したいという気持ちと自分が役に立つ事が出来る最大のチャンスだと思ったことと、1日でも早くの復興をして辛い思いをしている人のために、どんなにしんどくても人々の笑顔を取り戻し、たくさんの人々を支えることが出来る土木の仕事をしたいと決心しました。

今まで通りの石川県を取り戻すためだけでなく、突然の自然災害による崩壊を防ぐためにもこれからの半年間は日々の学びを大事にしながら、夢である「地域の方々から感謝される仕事をする」を達成させると共に、人々の当たり前を守れる人になりたいと思います。

## 優秀賞

# それでもやっぱり

宮下（みやした） 太久郎（たくろう）［金沢市立工業高等学校 土木科 3年］

私は高校の友達とこんな話をする。「この学校で一番すごい科はどこなのか」この話になった時いつも土木科だけが一番最初にすごくないと言われる。機械科は車を電気科は電気を電子情報科はスマホを建築科は家や建物などを武器として挙げてくる。私はダムや道路、トンネルなどを武器に挙げるが他の友達に「それって地味だね」と言われる。いつもそんなことないと思いながらこの話をしている。

私が工業高校の土木科を志望した理由は親戚のおじさんが土木関係の仕事をしていて私が進路に困っていた中学二年生の時に現場で働いている姿を見させてもらったことがきっかけで高校では土木を学びたいと思ったからである。だが決め手はこれだけではない。その時おじさんはこんなことをいっていた。「建物を建てるわけでもなく設計をするわけでもなく地味な基礎の作業だけどやはり建物が建った時にはとても達成感がある」と。この言葉を聞いた時に私はとてもかっこいいと思った。その思いを胸に私は土木科に入学した。高校で学ぶ土木工学はどれも新鮮でますます土木のことが好きになった。そんな矢先土木科は地味と言われた。私は意外だった。こんなにもかっこいい土木の仕事を地味と言われるなんて。理由を聞いてみると目立たない仕事、すごい発明をしていないなど色々なことを言っていた。考えてみればそう言いたい気持ちもわかる。何かを発明したり、建物として目に見えて目立つような仕事の方がかっこいいのかもしれない。だがその目立つ仕事を陰ながら支え、地味と言われてもなくてはならない存在というのもとてもかっこいいと思う。さらに高校に入ってから土木を好きになった出来事がある。それは1月1日に起きた能登半島地震である。私は石川県に住んでおりこの地震を経験した。私の地域では被害があまりなかったが能登半島はとても悲惨な状態になってしまった。建物は崩れ、道路も壊れた。こんな状況でもすぐに動いたのが土木を仕事としている人たちである。救援部隊がすぐに現地に行くことができるように壊れた道路を整備したり、建物の下敷きになっている人を助けたり。私はそこの時まで土木という仕事は誰かを助けたり、救ったりする仕事では無いと思っていた。だが実際は違った。人の命を助け、たくさんの人を救っていた。こんなかっこいい仕事は他にあるだろうか。

話しを戻すと「どの科が一番かっこいいか」やはりどの科も違ってどの科もいい。だが特別私が土木にかける思いは人一倍強い。この強い思いを掲げこれからの土木作業に情熱を注ぎこれから多くの人を支えられるような存在になるために技術を磨き、たくさんの人の命やこれからの時代を支える建物の基盤を作っていき、これからの土木業界を支える柱のような存在になりたい。

## 優秀賞

# 努力と苦労の美しさ

笠井（かさい） 巧（たくみ）［静岡県立沼津工業高等学校 建築科 3年］

私の周りには建築関係の仕事をしている人はいません。しかしなぜ私が建築関係の仕事に就きたいと思ったのか。それは自宅付近の神社に訪れ細部の美しさに心を打たれたからです。

私は子供の頃から何故か神社というものが好きでした。醸し出す不思議な雰囲気、普段生きている世界と全く別の世界のように感じていました。高校に入学し建築のことを学びそれは人の苦労が作り出した美しさの力だとわかりました。神社は普通の住宅と違い完全に木造でねじなどを多用していません。木材同士を丁寧にかみ合わせてあの形を保っているのです。とても高度な技術、集中力がなければ成り立ちません。建築のことを学んだことでその苦労が身に染みてわかるようになりました。それと同時にもっと神社のことが好きになりました。たった一つの、そこまで大きな建造物でもないのに想像もできないような努力が詰まっているのです。少しの誤差も許されない世界で生きている人たちがいるのだと感じました。そんな人たちにあこがれて私は宮大工になりたいと強く思うようになりました。私は日本の伝統が大好きです。すべて人の手で行われており、多くの時間と苦労が詰まっています。言ってしまえば作り手の人生の一部なのです。その中でも宮大工は一番と言ってよいほど多くの時間を要します。苦労すればするほどその作品が美しくなると私は考えます。日本の伝統のことを知れば知るほど、自分の苦労を、人生の一部をいろんな人に知ってほしい、感じてほしいと強く思うようになりました。建築科を選択してからは苦労と努力の連続でした。すべてが新たな知識であり、長期的な課題にも頭を悩まされました。しかしだんだんと努力、苦労することが楽しくなっていきました。努力の量はとても分かりやすく結果に出ます。努力の差を顕著に感じるのが大好きになりました。それからの生活は選択を迫られたときにできるだけ大変になる方を選んだり、人が見ていない細かなことにも気を配って生活するようになりました。私が建築科に入って一番良かったと思ったことは、努力の楽しさを学べたことです。私は建築科が五つの学科の中で一番大変だという自負があります。クラスメイトも満場一致でそのように答えると思います。私たち建築科は常に努力と苦労をし続けてきました。しかし私が目指している宮大工の大変さはこんなものではありません。この三年間の経験を活かして努力を続けていきます。そして誰かに美しいと思ってもらえるような作品を作ってみせます。

## 優秀賞

# 私の理想

上島 翔大（かみじま しょうた）［静岡県立浜松工業高等学校 理数工学科 3年］

設計したものが形になり人々の生活を支える。このような産業に私はとても魅力を感じる。建設産業は人々が豊かに暮らすために必要とされている重要な産業だと思う。実際、多くの人は家に住みそこを拠点にして活動している。また建物は人が生活する目的以外でも、人がそれを見て芸術的だと感じたり観光場所としても使われる。建設産業により人が集まる場所ができたり人の心を動かす芸術ができたりする。

私が建物に興味を持ったのは小学生のときだ。小学生のときに自分の家をリフォームした。リフォーム後は部屋の印象がガラッと変わり、湿気も少なく住みやすい家になった。父の要望を大工が表現していく過程に感心し、建物の素晴らしさと奥深さを知った。この頃から大工の凛々しい姿に惹かれ、自分の手で建築してみたいと思うようになった。その後は、高校2年の夏にインドネシアへ、秋の修学旅行でマレーシアへ行き海外の建物を実際に見た。そこでは、自分の住んでいる日本では見られないような住居が多くあり、特にインドネシアでは壁がコンクリートのようなものでできており屋根がトタンでできていて窓にガラスがついていないところが多くあった。それに、都会から離れると高い建物がなくなり周囲の建物の高さが同じくらいで密集して建物が並んでいるところもあった。

さらに高校での研究で、地震の多い日本と地震の少ない国を比較して日本がどれだけ地震に対策をしているのかということについて学習している。日本は何度も地震の影響を受け、その度に法を変えたり地震によっての被害を少なくする工夫がされていた。一方で地震がほとんど無い国では地震への対策が重要視されないため日本では造ることが制限される建物がある。自然条件の違いにより国で建物の構造が変わる。また、先進国と発展途上国で経済的な理由で地震への対策も変わると考えた。実際に見たことがあるインドネシアとマレーシアそして日本はそれぞれ建物の雰囲気が異なっていた。このように地域の様々な環境がもたらす建物の造り方にも興味がある。

世界には貧困により住むことで精一杯の暮らしがあると知り、私たちがあたりまえに生活している環境は豊かで恵まれていると気づいた。現在日本の建築家たちの中には、より高度な技術でより芸術的なものを作ろうとする風潮がある。しかし、日本に囚われず視野を広げて世界を見ると、芸術を求める以前に私たちからすれば当たり前である快適な暮らしを送るための機能が十分に備わっていない地域がある。私はそのような地域に、その土地の環境にあった快適に暮らせる住居を作りたい。そのために更に建築について学び、技術や考え方を身につけたい。

## 優秀賞

# 未来を創る

松下（まつした） 燿大（ようた） ［静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年］

建築とは何か、という質問が来たときあなたならどう答えるだろうか。一般的には、建物を建てることや、建物を作るといった答えが思い浮かぶだろう。私も、高校に入るまでは同じような回答をしていた。しかし、実際に建築を学び始めてからは、その答えが大きく変わった。「未来を創ること」こそが、建築の本質だと私は強く思う。

中学生の頃、私は建築に特別な興味を持っていなかった。安全な家や頑丈なショッピングモールは、当たり前の存在であり、深く考えることも無かった。そんな私を変えたのは、中学の修学旅行で訪れた京都の木造建築だった。それまで、大型建築といえば、オフィスビルやショッピングモールのような、大きな柱と壁を持つものばかりをイメージしていた。しかし、清水寺や伏見稲荷大社のような木造建築物は、繊細な木材を用いた華奢な見た目でありながら、圧倒的な存在感を放っていた。骨組みがむき出しになった構造や、巨大な空間に圧倒され、私はその魅力に取り憑かれた。修学旅行から帰宅後、私は夢中になって建築について調べ始めた。調べれば調べるほど、建築の世界は奥深く、そして美しい。その無限の可能性に、私は深い感動を覚えた。

高校は、迷わず建築系列のある学校に進学した。本格的に建築を学ぶと、構造を知るだけでも大変な上に、製図や実習が重なり、時間に追われる日々を送った。しかし、その時間は決して無駄ではなかった。構造を学ぶことで、身近な建築物から大型建築物まで、その骨格を理解できるようになった。製図では構造を視覚化し、実習では実際に手を動かしながら理解を深めた。建築を理解する喜びは、何物にも代え難かった。

そんな中、大阪・関西万博のニュースを見た。工事現場の映像と共に、完成イメージの映像が流れた。そこには、世界各国のパビリオンが並び、多くの人が行き交う空間を、日本の木造建築がリングとなって取り囲む姿があった。万博では、未来社会を垣間見せてくれる。そして、建築は、単に物理的な空間を作るだけでなく、人々の心を動かし、社会に変化をもたらす力を持っている。見たことも無いような建築を見ながら、建築とは「未来を創ること」であると確信した。

私は建築家として、未来を創造していくことを夢見ている。未来を創造することは容易ではない。しかし、私は諦めない。建築の仕事を通して、誰もが安全に安心して生活できる社会を実現したい。様々な地球課題や社会課題を乗り越え、誰もが幸せな未来を建築によって創造する。それが私の夢だ。

## 優秀賞

# 未来の環境と建築

岩室（いわむろ） 奏篤（たくと）［滋賀県立彦根工業高等学校 建設科 1年］

私は建設産業についてたくさんの考えを持っています。一つ目は、建設産業の中に、環境に良い植物を取り入れて地球環境を改善し、地球温暖化を止めることです。今の地球は、二酸化炭素の発生による温暖化が深刻になっています。そのため、温暖化を止めるためには、二酸化炭素の発生を最小限に抑える必要があり、そのための対策が必要です。二酸化炭素の発生源はいろいろなところにあります。その中でも、全体の30%以上が建設に使われる資材からだと言われています。そこで私は建設に使われる資材を改善し、より環境に優しい街を実現させたいです。

二つ目は日本文化を大切にし、建築物に取り入れることです。日本には昔からの文化が今でも続いています。でも何百年、何千年後かには、日本文化がなくなってしまう可能性があると考えます。それでは、今までの伝統的な文化も忘れられてしまいます。そのようなことを避けるため、近代化していくことによって欧米化している現代の建設物にも、今より日本の文化を取り入れ、他国との文化の違いを大切にしていくことが重要だと考えます。

三つ目は建設物のレパートリーを増やすことです。ここでいうレパートリーは、建設物の基盤となるジャンルの種類のことで、それを増やすことにより、新たな建築法、材質、その活用、新しい建築物の形を増やすことなどにつながると考えています。増やすことのメリットは、今まで表現することができなかったオブジェクトを現実世界で表現させることができ、その人の表現の幅や、技術力を高めることができるようになる所です。それは今までに無かったオブジェクトによる、都市の発展にもつなげることができます。もし、そのような都市開発が可能となれば、海外との文化、都市の特徴の差別化で、日本らしさを出すことが可能となります。また、逆に言えば、世界全体をこの技術で大きくすることができると言えます。

四つ目は、CGやモニターの映像を大規模に使い、空間をうまく使う技術をつけることです。例えば、小さい土地では、図書館や展示会などの大きな土地を使うような建物を建てることはできません。しかし土地をあまり必要としない360度の球体型のVR空間を作り、どこでも展示物を見ることのできるような空間を作れたら、近代化が進むにつれて生まれた土地問題を改善し、克服するような対策をとることができると考えました。このように、今問題となっている物事を改善していくことが、今の世界に大切な要素だと思います。あくまでこの例は、一つの私の考えですが、未来に良いことを考え、進化する技術力を磨けば、不自由なく誰でも楽しめる世界ができると思います。

## 優秀賞

# 夢に向かって

鳥越（とりごえ） 眞洋（まひろ）［岡山県立岡山工業高等学校 建築科 1年］

私の将来の夢は、人々が安心して過ごせる家や、駅や学校などの生活を豊かにする建物を建てる建築家になることです。私が建築に興味を持ったのは、私の家の近所にある図書館のデザインに憧れを持ったのがきっかけです。その夢を叶えるため、岡山工業高校建築科に入り、日々様々なことを学んでいます。

私が目指す建築家は、美しいデザインかつ、そこで暮らす家族が安心して過ごせるように考慮した家を提供できる人です。家族が安心して過ごせる家を建てるには、そこで暮らす人々の職業や生活様式、家族構成などのライフスタイルについて考える必要があります。例えば、高齢者の心身を考え、廊下を車椅子で行き来できるようにする、子供の成長を考えて、子供部屋を幼い頃は、遊ぶため、成長して大きくなると勉強するため、と成長に応じて子供部屋の用途の変更やレイアウトの変更ができるようにするなどがあります。また、安心できるような家を建てるには、快適さが欠かせません。私が思い描く快適な家は、個人のプライベート空間を大事にしつつ、家族の団らんもしやすいような家です。そのためには、居間に各部屋への交通を取り入れ、家族のコミュニケーションをとる機会をつくる設計にするなどができます。

現在、地球が抱える、地球温暖化やそれに伴う異常気象にも、目をそらさないで向き合う必要があります。環境に優しい太陽光や水力などの再生可能エネルギーを活用した建築や、本来廃棄される木片を活用した建築が現在、行われています。私は、自然を最大限に取り入れた家を建てたいです。自然を最大限使うのには、例えば、グリーンカーテンなどを用いて、日陰を作り、冷房をつける機会を減らす、太陽光発電を用いたエネルギーの自給で、非再生可能エネルギーの消費を減少させるなどがあります。

夢の実現のため、私は高校卒業後、大学に進学し、より専門的なことを学び、設計事務所に就職し、そこで、様々な経験を積みたいと考えています。その後、独立し、自分の理想や独自のデザインを反映させた建物を設計したいと考えています。高校での日々の学びは私の夢の土台となるので、大切にしたいです。私はまだ、高校1年生でまだまだ学ぶことがたくさんあるので、日々、夢に一歩ずつ近づくため新たなことにどんどん挑戦して、成長していきたいです。また、これからたくさんの障壁にぶつかることになると思うけれど、周りの人と協力して乗り越えていきたいです。私は、建築家になることを最終ゴールとしないで、これからもその先を見据えて一歩一歩前進していきます。

## 優秀賞

# 道路パトロール

藤原（ふじわら） 悠（ちか）［岡山県立岡山工業高等学校 土木科 3年］

私は、高校の授業である課題研究で道路パトロールについて学んでいます。近年我が国では、インフラの老朽化が深刻な社会問題となっています。特に道路は、交通量の増加や天候の影響などにより老朽化が進行しています。道路の安全性を保ち、交通事故のリスク低減のためには定期的な点検やメンテナンスは欠かすことはできません。そこで、私たちが道路パトロールを行っています。

道路パトロールは、私たちの身近なICT機器であるスマートフォンに搭載されている道路パトロール用のアプリケーションを利用し、「産」「官」「学」が連携して進めています。「産」は、保守・維持を行う建設会社、「官」は、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所、そして「学」は、私たち岡山工業高校をはじめ、岡山県内の土木系学科の高校生が参加しています。私たちが現場で道路の異常を撮影すると、その異常箇所や異常内容が自動的に記録されます。この情報を「産」「官」「学」がクラウド上で共有することによって、道路インフラの現状把握からメンテナンスや修繕まで、スピード感をもって取り組むことができます。これは、ICTの力を活用した新しい形の社会貢献活動だと考えています。

今までに点字ブロックのがたつきや、インターロッキングブロックの陥没などの異常を発見し、早期に維持工事を行いました。私たちが、実際にパトロールした場所が修繕されていたときは、達成感と大きな喜びを感じました。しかし、私たちがパトロール中に異常箇所を見逃してしまうと地域の人々を危険に晒す可能性もあるので、高校生であっても責任が大きいことを自覚し、取り組んでいます。

この活動を通して、私は将来「地域に貢献できる土木技術者になりたい」と思うようになりました。パトロール中に多くの方が「お疲れさま。ありがとう。」と、声をかけてくれます。そのようなときは、自分が学んだことが地域の人の役に立っているのだと実感でき、やりがいを感じます。そして、「誰かの役に立つ土木技術者になりたい、建設業界へ就職して多くの人から感謝される仕事がしたい」と強く思いました。

第74回全国植樹祭で天皇皇后両陛下が岡山県にお越しになり、その際本校にもご訪問していただきました。私は道路パトロールについてご説明いたしました。皇后様から「将来どのような人になりたいですか。」とご質問がありました。そのとき、私は両陛下の前で「立派な土木技術者になります。」と約束しました。私が思う立派な土木技術者とは、人として恥ずかしくない土木技術者です。例えば、基礎工事では、不正を行っても施工完了後には見えません。しかし、今後使用していく人の命に関わります。だから、いくら見えない場所でも決して手を抜いてはいけないと思います。そんな正義感や責任感を貫くことができる土木技術者になりたいと思います。

## 優秀賞

# 強くなった将来の夢

井上（いのうえ） みこと［長崎県立長崎工業高等学校 建築科 3年］

日々、私は3つのことを学んでいます。

1つ目は建築についてです。学校の授業を通して国語や数学などの普通教科だけでなく、色や空間など、人が住むうえで快適に暮らせるような家について学ぶ「計画」や、家が建つまでの工程について学ぶ「施工」、建築基準法などの法律について学ぶ「法規」、荷重がかかったときの反力を求める「設計」など建築について幅広く学んでいます。また、座学以外にも、実際に測量をしたり、鉄筋、コンクリートの材料実験をしたりなど、実習を通して実際に目で見て体で感じることができます。そのおかげで今までとは違う視点で、家についてより興味を持つようになりました。

2つ目は社会で生き抜くための力です。工業高校では多くの人が、卒業した後は就職しています。そのため、入学してからは、あいさつや対応、入退室の仕方など会社で働くうえでの礼儀についても3年間を通して学んでいます。私自身が成長したと感じることは目上の人に対する言葉の使い方と声の大きさです。中学の時は、「来ました。」などの不十分な言葉ばかり使っていました。しかし、3年たった今では、「いらっしゃいました。」などの正しい言葉で会話できるようになりました。また、中学の時より職員室が広く、大きな声で話さないと声が届かないので、意識して相手に聞こえるように心がけ、大きな声で堂々と話せるようになりました。

3つ目は企業の方との関わりです。インターンシップや、企業説明会、見学会、出前授業など、企業の方とたくさん関わる機会があります。説明会では、働いている人から企業や建設業の魅力についての話をしていただき、長崎の建築業界はどのような現状なのかを教えていただいています。そして実際に現場に行くことで学校にはない職場の雰囲気や作業内容を体験することができました。3つ目のいいところは、企業の雰囲気を知り、自分に合う会社なのかを知ることができるところです。多くの企業の方々と接することで各会社の魅力を知ることができ、自分の行きたい会社を見つけて自分の進路に活かすことができます。このように、専門分野や社会においての礼儀、企業の方々と関わりを通して自分が長崎で活躍できるように多くのことを学んでいます。

この3年間を通して、私は、施工管理という仕事を通して人を喜ばせ、社会に貢献していきたいと強く思うようになりました。この夢を叶えるために、今の自分にできることをして人として成長できるように、長崎で活躍できるように頑張りたいです。

## 優秀賞

# 未来へ繋ぐ建設のバトン

中川 元太（なかがわ げんた）［長崎県立佐世保工業高等学校 建築科 2年］

建設産業はこれからの日本、世界が発展を続けていく中において、なくてはならない産業であると考える。私がそう考える理由は「南海トラフ大地震」と「地球温暖化問題」にある。

一つ目に南海トラフ大地震。科学者によると、今から四十年以内に九十％の確率で発生すると言われている。東日本大震災の時の被害を思い出してほしい。その時たくさんの建物が津波や地震によって倒壊した映像が流しだされた。その時でさえ尋常でないほどの被害があった。しかし、南海トラフ大地震は東日本大震災よりも強い地震、津波が予想されており、中には津波によって沈むと言われている都市もある。さて、この地震に対し、私たち建設産業に関わっている人々は何を考え、どう行動するべきだろうか。私は、何もしない四十年にはしたくないと考える。建築基準法は、大きな災害があったときによく法改正が行われる。建設物の地震などの災害に対する意識は年々高まっていると思う。そう考えると、日本の建設産業は「災害によって被害を受け、その被害を次の災害が起こったときに受けないようにしようと対策をする」という一連のサイクルによって成長してきたと言えると考える。「対策を徹底する」これが今の建設産業に求められていることではないかと思う。「建設物」それは、そこに住む人が幸せに暮らせるのはもちろんのこと、「生命・財産」を守るものでならなくてはいけない。では、実際にどのようなことができるのだろうか。まず私たちが、建設と災害の関係性についていつも意識をしておくことが大切だと思う。逆に建設産業に携わる人々が「災害に対する思い」を胸に持ち行動をしないと災害によって大きな被害を生み出すことに繋がるのではないだろうか。今私たちは、その運命の分岐点に立っていると思う。建設産業は、とても大きな力があると考える。建設産業が、災害のことを考えて動き出せばきっと日本はもっと素晴らしい国になっていくだろう。

南海トラフ大地震に加えて近年重要視されているのが「地球温暖化問題」である。資源を無駄にしない建設を行っていく必要がある。そのことを考えると、むやみやたらな都市開発に踏み出すことは「地球温暖化の進行をさらに早めている」ということになる。それにいち早く気づき、地球温暖化に対してどう解決策をとるのかということも大事になってくると思う。

建設産業は「自分の創造を形にできる素晴らしい産業」であるとともに「日本の未来を担う先導者の様な産業」であると考える。五十年後、百年後の未来、日本がどんな姿になっているかは全く想像できない。でも一つ確実に言えるのはその未来は「建設産業」にかかっているということだ。だからこそ、建設産業は未来の日本をより良いものにしていけるようその時代に合わせて常に考え、行動し、そのバトンを未来の建設産業に繋いでいくことが何より大切だと思う。

## 優秀賞

# “木軸ペン”から始まったものづくりの世界

平野（ひらの） 蓮翔（れんしょう）［長崎県立長崎工業高等学校 建築科 2年］

私の夢は、オンリーワンのものづくりをする大工になることです。

皆さんは、「木軸ペン」を知っていますか。イチイガシ、ユズリハ、タモ、ウェンジなど、様々な銘木からつくられるシャープペンシルやボールペンのことです。私は、中学生の頃から文房具を集めることが好きでした。その際に、この「木軸ペン」と出会いました。金額が高く手が出せずにいましたが、見かねた祖母がプレゼントしてくれました。実際、手にとってみると、手触りが良く木目が豊かで、世界に同じものが1つとしてないオンリーワンのペンに大きな特別感を感じました。そして、将来は木目を生かし家具から家まで建てることができる大工になりたいと思うようになりました。

工業高校の建築科に入学した私は、早速、木材加工を主とする部活動に入部しました。毎日、手加工の方法や機械の使い方を先生方や先輩方に教わり、大きな学びを得ています。現在、私は高校２年生ですが、部活動で忘れられない思い出があります。

それは、昨年度の文化祭で木工作品を販売したときのことです。私は、スピーカーと移動式ラックを製作しました。製作後、移動式ラックに、顧問の先生より販売できないとの判断が下されました。なぜなら、圧倒的に商品としての完成度が低かったからです。正直最初はとてもショックでした。ですが絶対に動いてはならない部分が動いてしまい、尚且つ耐久性がそこまで見込めないものだと先生のご指導のもと気づくことができました。

もう一つの作品は、先生のチェックも通り、製作分全てを完売することができました。ですがやはり販売することのできなかった移動式ラックのことが忘れられません。そして、私は決心しました。「リベンジしよう。」と。これは将来の夢に関係してくることでもあります。私の夢は、お客様にオンリーワンの商品を届ける職業。第一に安全性に欠けていれば商品にならないし、そこに自信を持つことができません。材料もたくさん失敗すればするだけお金がかかります。限りある資源を大切にすることも学びました。

学びを得てからの部活動はさらに楽しくなり、自身のやる気も高まっています。現在は、校内にある一室の改修工事に携わっています。作業机の表面に化粧板を張る際、長く平坦な状態を保つために、空気が残らないよう土台にしっかりと押し付けました。天井ボードの貼り付けでは、向きの確認を徹底し、ビス止めする際には下地がある所に真っすぐ固定しました。今まで以上に精度にこだわるようになったと実感しています。これからも、私は自らが行う作業や作り上げる作品の質をさらに高め、その経験と技術を糧に、自分の夢に繋がるよう不断の努力を続けていきます。道のりは長いですが、失敗は成長への一歩目。恐れずに進んでいきたいと思います。

MEMO

MEMO

建設業しんこうWeb
建設産業の今を伝え未来を考える
https://www.shinko-web.jp/

建設産業人材確保・育成推進協議会　事務局／ 一般財団法人 建設業振興基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-2-12 虎ノ門4丁目MTビル2号館6階　TEL 03-5473-4572　FAX 03-5473-4594
E-mail jinzai@kensetsu-kikin.or.jp　URL https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/

※本冊子掲載記事の無断転載を禁じます。

建設業しんこう別冊
令和6年度　作文コンクール 入賞作品集
編集・発行 一般財団法人 建設業振興基金